

D. H. Lawrence: 小説に現われた女性 (その4)

—— 陰に潜んだ女性 ——

Aaron's Rod, Kangaroo を中心に

石田 美栄

I

Sons and Lovers を自己達成に出発する一人の男の誕生とすれば、*The Rainbow* は女性解放の三代記による、真の自分・本質を求める現代的な解放された女性の誕生である。

人生成就の最も重要な人間関係である、両性関係の理想を追求してゆくにふさわしい、ここに生れた男女が会って、愛の理想を説いてゆくのが *Women in Love* である。その理想追求の過程に、ロレンスの女性観の行き止りをみることができる。

. . . , in the course of studying the development of woman as individual, his point of view has changed and he no longer believes this development to be desirable: change confirmed and stressed in *Women in Love*.¹

What he fears in women is "lure for possession, a greed of self importance in love." He hates in her the *Magna Mater* claiming that "all was hers, because she had borne it." He finds intolerable, even in Ursula, . . .²

Women in Love で両性関係において、知性とか愛とか母性とかによって自分の意志を強く押し出し、男性を自分の好みに仕立て上げ、支配しようとする女性を烈しく攻撃し、否定した。また、両性関係において女性の母性的本質に *Magna Mater* を求めて、大地なる母・生命の泉として女に寄り掛る男は、相手の女に嫌悪の念をおこさせ、自己の破滅を招くことになることを描いた。そして同時に Birkin は従来の愛といわれるものを否定して、新しい愛の理想的境地を探求して、生きることの意味・目的を説いて、"freedom together", "star equilibrium" と称する理想境を一応 Ursula との間に達成したかにみえるのであるが、男と女の結びつきに加えて、男性同志の結合の重要性、必要性を説きまた求めるに至る。しかしこの主張は Ursula (女性) には理解されないというところでこの小説は終わっている。

この後第一次世界大戦中の屈辱的な惨めな経験を経て、愛はロレンスにとってその新鮮味を失い、女性は何にかを充足させる力を失っていた。こうしたロレンスが大战後やっと英国を脱出し、最終目的地であるメキシコに至るまでの放浪の地、イタリアとオーストラリアで各々書き上げたのが *Aaron's Rod* と *Kangaroo* である。そしてこれら二つの作品に共通している点は、それまで常に (*Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love*) 男女の関係が主に扱われて、両性の世界が同等に小説全体を覆っていたのに対して、ここでは男性の世界が中心となり、女性の世界は後方に追いやられてしまっていることである。男性同志の対話が主力

をなし、*Aaron's Rod* では女性支配への訣別、男性優位の主張に到達、*Kangaroo* では男の魂の孤高の境地を得て、“dark gods” ideas による男同志の結びつき、男の世界を政治運動を通して試みるが失敗に終わっている。「愛の予言者」、*“Priest of Love”* が女性を陰に追いやって、男性優位の主張のために、“dark gods” ideas を必死に模索した “leadership novels.” はイタリアでもオーストラリアでも成功しなかった。

こういうことになると「小説に現われた女性」というよりは「陰に潜んだ女性」と題した方が適切であろう。しかし女性たちは影のようにつきまとい、男たちの行動の要因をなしており、支配的・所有的な母性の世界に対抗する男性世界の必要性を模索する過渡期の現象としてとらえたい。なぜならば、ロレンスの主な小説に現われた女性を創作年代順に研究してゆくことによって、そこに女性の本質のある面を見極めたいと共に、両性関係・夫婦関係変遷のあるパターンを追うことを考えているのであるから。

もう一つ両作品に共通している重要な点は、男性同志の結合と男性優位の主張（それまでの対等な人間関係に代って支配と服従の関係となってくる）を実現できるのは、疲れ果てた古いヨーロッパ文明の中にはないことが暗示され、さらにそのためにヨーロッパ文明すなわちキリスト教文明の世界から離れることである。

II

1916年の7月に *Women in Love* を書き終えてから、第一次世界大戦中の迫害と貧困のつめな経験を終て、1918年までには、愛はロレンスにとってその新鮮味を失い、女性にはなにか充足させる力を失い、さらに人間嫌いにまで落ち入っていた。*Aaron's Rod* はこうした時期書き始められ、中断されていたものが大戦後英国から脱出して、イタリアで1921年に完成されたもの、“a semi-biographical story with English and Italian background”³ ともいわれ小説家として不安定な時期のロレンスを反映している。

The novel's intrinsic interest surely lies in its implicit commentary upon the Lawrence of 1917-21, bored with fiction, doubtful about his marriage, uncertain where to live, and wholly out of tune with the chaos of attitudes he encountered both in England and abroad. The peculiar unrootedness of *Aaron's Rod* reflects his own unsettled life in these years.⁴

従って、誰れの見解も一致するように、それまでのもの、特に *The Rainbow*, *Women in Love* と比較すると、部分的には旅行記的な本領を発揮して優れたところがあるにしても、質の劣る作品といわざるをえない。例えば Keith Sagar は “lacking the form, coherence, range and destiny of those works”⁵ と評した次のように指摘する。

In *The Rainbow* and *Women in Love* Lawrence had developed the appropriate artistic resources to cope with this kind of probing below the daytime consciousness of a character. He cannot draw on these resources in *Aaron's Rod* because the novelist himself to a large extent shares the doubts and vacillation of his characters. The vision of disintegration has overwhelmed the integrity of the artist, which cannot create firm values

out of the chaos he contemplates.⁶

しかし、この作品をロレンス全体の流れの中でみてゆく時、ロレンスはすべてと行ってよい程、作品を問いかけで終らせており、*Aaron's Rod* は *Women in Love* の結びの問いをもう一度問い直し、もっと進めて明確にし、またある意味ではヒステリックにエゴイスティックに結めていったところに意味があるといえよう。この点を Graham Hough は次のように評価している。

The relation between man and man is explored, if inconclusively, far more fully than in *Women in Love*; and linked closely with this, there are failures and breakdowns in the relation between man and woman. The other elements of the book are miscellaneous.⁷

ここに Hough も指摘している、男女関係の失敗・崩壊が描かれている。この点でも *Aaron's Rod* は *Women in Love* の問題をいっそう明確にしている。つまり、ロレンスの生涯に亘ってつきまとい、多かれ少なかれ絶えず作品に顔をのぞかせている「支配的・所有的人間」という女性観は、*Women in Love* では両性関係の理想境追求のために、そうした本質を打ち砕こう、なんとか棄てさせようとする努力がなされている。*Aaron's Rod* では、そうした努力は締められ、どうにもならないものと既定し、それを遠ざけることを考え、それから逃げ出し、さらには、それに勝る男同志の結合を求める。そして、男性同志の結合の重要性、必要性を追求してゆくわけである。しかし Draper もここに指摘するように、brotherhood, friendship の対等の関係（両性関係では freedom together, star equilibrium）に失敗、そのような関係を説くことを止めて、"master-disciple aspects of the relationship"・支配と服従の人間関係を説くことになる。

. . . "eternal union with a man too: another kind of love." The possibilities of this were explored in the proposed *Blutbruderschaft* between Gerald and Birkin. An attempt at reviving and extending this is made in the friendship between Lilly and Aaron, but the relationship is that of master and disciple, rather than of equals.⁸

またこうした男性世界を作り上げることによって (power-urge), 両性関係においても、女性の本質的な支配力 (love-urge) を押え込み服従させることを秘かに考えているわけである。

Women in Love では Birkin がロレンスの代弁者で、両性関係の理想を説き、それをいっそう完全なものにするための男同志の結合の必要を説いたわけであるが、*Aaron's Rod* では Lilly がそれを受け継いで Aaron と共に追求してゆくことになる。Lilly はその当時のロレンスを反映して自信のない存在で、Murry のいうように "And in Aaron, Lawrence created⁹ the only kind of man from whom he could, in imagination, have got what he needed." であり、Aaron は "Lawrence's dream-friend" あるいは "a dream Lawrence" ということになって、ロレンスの二つの面を表現する。Aaron が質問者、Lilly はその解答者となって話しの中心は進む。Hough はこれを "The fact is that Lawrence has split his own consciousness between two characters in the story — Aaron and Lilly. Lilly is

Lawrence the prophet, and Aaron is the escaped denizen of Eastwood.”¹⁰ と説明し、R. Aldington は “When Lilly and Aaron are together, they sort themselves out a little, like a Doppelgänger.”¹¹ (下線筆者) という。このように Lilly と Aaron を重ねて考える時、その背後にいる Lottie と Fanny もまた一人の女性の二面、つまり Frieda Weekley と Frieda Lawrence として重なり合ってくる。三人の子供があり、その子供たちを棄ててロレンスの元に走った Frieda Weekley (Lottie — Aaron)。ついに子供を持つことのなかった Frieda Lawrence (Fanny — Lilly)。21章のうち Lilly と Aaron の交わりや対話は5章にすぎないが、両者の登場場面ではこれらの男女四者が奇妙に絡まり、また重なり合って、フリーダとロレンスの意識の世界、すなわち女性の世界(愛、母性、支配しようとする力)に対抗する男の世界の必要性、男同志の結合を説くロレンス自身の自問自答のように思えてくる。そして彼等の妻である Fanny と Lottie が女性人物の中心であるはずだが、“The only novel he wrote without a main female character, it attacks women with little moderation; . . .”¹² と評されるように、小説の表面にはほんの少ししか現われない。しかし影のようにつきまとって、男たちの行動の要因をなしている。

Aaron と Lilly がこの小説の中で結婚というものを辛らつに批判しているとしても、ロレンス自身は結婚制度を信じた人であったし、Aaron が将来二度と Lottie の元へ帰って行くことはないというふしはどこにも見当たらない。従って “Aaron’s wife is behind in England, and he has apparently no intention of returning to her.”¹³ という Murry の短絡的な見解よりもむしろ Niven の次のような解釈をとりたい。

. . . ; the wives Lottie and Fanny come alive because they are independent and resistant. More over, both Aaron and Lilly believe in the enduring bond of marriage, even if their relationship with their wives is a struggle. Lottie and Fanny matter as people if Aaron and Lilly matter, for the two women are inalienable factors in the existence of their husbands.¹⁴

先ず前半 XI 章までの英国における Aaron’s Rod をみてゆこう。最初から明らかにされていることは、愛とか結婚は (Aaron は妻を愛しているけれども) Aaron にとって生きるに十分なものではないということ。

He recognized it as a secret malady he suffered from: . . .

A woman and whisky, these were usually a remedy — and music. But at the very thought, the black dog showed its teeth.¹⁵

従ってどうにかしなければならぬと思っているわけであるが、ここでは「共にいる自由」などということではなく、締め、すなわち家族を棄てて出てゆく、逃げだすことによってそれに勝る何かを模索し始める。また同時にそれまでのような両性関係も脇役たちの中に副線として並行させてゆく。その中で、愛は人生であり “Love is the soul’s respiration.” であり、愛のために自らを犠牲にする、それがなければ自分は死ぬという Jim が Aaron と対照的に描かれて、Lilly の烈しい攻撃を受けることになる。Lilly が “You should stand by yourself and learn to be by yourself.” (p.75) “You want to be loved, . . .” (p.76) という

のは、女に所有、支配されてはならぬということであろう。愛がなければ死ぬ、死にかかっているという Jim とは対照的に、妻からやっとなげだしている Aaron は、Josephine との愛に落ち入るすなわち屈することによって死にかかる。それは感冒により、死に頻することによって表現される——“I felt it — I felt it go, inside me; the minute I gave in to her. It's perhaps killed me.” (p.84)。自分は死肉であり“My soul's gone rotter,”と Lilly に訴える。Lilly は Aaron を頻死の状態から救い、Aaron の間に答える。それは女性の愛すなわち母性支配 (sacred motherhood, sacred childhood) への公然の非難であり、それに屈してはならない、また同時に manhood の重要性を説くことである。

“Men have got to stand up to the fact that manhood is more than childhood — and then force women to admit it,” said Lilly. “But the rotten whiners, they're all grovelling before a baby's napkin and a woman's petticoat.” (p.95)

“. . . And women will sacrifice eleven men, fathers, husbands, brothers and lovers, for one baby — or for her own female self-conceit.” (p.96)

“And can you find two men to stick together without feeling criminal, and without cringing, and without betraying one another? . . .” (p.96)

さらに Lilly は女の支配から脱して、自らの主になることを説き、brotherhood を説き、しかもそれは Herbetson の痛ましい戦争の状況描写が入ることによって、his own soul, the actual man 不在の衆団意識・行動ではなく、個人的な、固有な男同志の結合であるという。Aaron と Lilly はロレンス自身の二つの面を表わしており、質問者と解答者・予言者という設定は、Lilly がフルートを“Aaron's Rod”と名づけ、Aaron の“charm”, “personal vital force”と称するあたりから表面に浮び上ってくる—— “. . . Aaron and I are two identical little men in one and in the same little boat . . .” (p.105)。それはまた二人の共通意識、何か求めているもの、完全な男の世界 (the phallus) ・結合を象徴している—— a certain call upon his, Aaron's, soul (p.116)。

この後話しの上では、Aaron は妻と子供の所に帰ってみることによってその決意のほど、すなわちおし寄せせる女性の支配力に対する目覚めかけた男の世界が試される。それまでロレンスが描いてきた両性関係では、motherhood, powerfulness, あるいは passion, female pleading and appeal に結局は屈して、不本意ながらも女性の手落ちていった。しかしここで Aaron は決然たる態度で Lottie を振り切る。男も女も決して負けようとしな、屈しようとしな。従って、従来のロレンスの主張である polarity, star equilibrium は実現しない。

The illusion of love was gone for ever. Love was a battle in which each party strove for the mastery of the other's soul. (p.123)

But whether woman yielded or not, he would keep the mastery of his own soul and conscience and actions. (p.123)

こうして Aaron は女性との繋り・愛と訣別して、“perfected singleness”を宣する。

“ . . . Fanny wants children badly. I don't. I'm thankful we have none.”
“ . . . Sacred children, and sacred motherhood, I'm absolutely fed stiff
by it. That's why I'm thankful I have no children. Fanny can't come it
over me there.” (p.94)

こうした Fanny-Lilly の両性関係において、自分には子供がないから、母性支配に落ち入らない“freedom together”, “star equilibrium”を保っているかのように考え、Aaron をそうした支配から救出し、自分の理想（男性世界）追求の相棒たるべき人間（perfected self, possessing of one's own soul）に導こうとする。このあたりは Murry の私情の入った見方とはいえ“The childless Lawrence would like to convince himself that it is due to his perfected manliness that he has no children.”¹⁶に真実性があり、この小説の行き着く挫折を懸念せざるをえない。

物語の舞台は英国を離れて、イタリアへの旅行記を背景にして Aaron の内省が続く。すなわちそれはロレンス自身のその当時の意識の反映であり迷いを表わしている。英国を離れたロレンスは、以後短期間訪れたことはあったが、二度と祖国に暮すことはなかった。従ってこのイタリアへの旅は、これ以後ずっと外国を彷徨う作家ロレンス、新しいロレンス（Aaron's rod¹⁷で象徴される“the budding symbol of his new life”）への出発である。新しい business, responsibility への踏み出しは次のように思いめぐらされる。

His old sleepy English nature was startled in its sleep. He felt like a man who knows it is time to wake up, and who doesn't want to wake up, to face the responsibility of another sort of day.

To open his darkest eyes and wake up to a new responsibility. Wake up and enter on the responsibility of a new self in himself. (p.146.)

そしてさらに、Aaron の意識の中で Aaron-Lottie すなわち男女の関係、それまでの作品に流れていたものが要約され、端的に明確に回想される。

The female will! . . .

. . . : that she, as woman, was the centre of creation, the man but an adjunct. She, as woman, and particularly as mother, was the first source of life and being, and also of culture. The man was but the instrument and finisher. She was the source and the substance. (p.154)

女の意志は男を完全に所有することである。そしてこれは全白人社会の信じるところであって、小供たちの母親である女はどうして屈服しようか。男が屈服しなければならない、しかし Aaron は屈するわけにはゆかないと思う。とにかく Lottie から逃げ出した Aaron は彷徨ううちに屈服することのできないものを“his very being pivoted on the fact of his isolate self-responsibility, aloneness”, “His intrinsic and central aloneness was the very central of his being.” (pp.158-9) と悟る。そして“Give thyself, but give thyself not away.

That is the lesson written at the end of the long strange lane of love." (p.161)と結論して、孤独を受け入れるということは、それまで相剋のうちにも、理想境として追求してきたものを無益とするのか、あるいは耐え難い無理として締めるのか、とにかく逃げ出すことになる。Aaron はそれまでの人生（ロレンスのそれまでの小説の主題）を越えた、しかしまだ次への踏み出しをためらっている。いったい何処へ。何も分ってはいない。

There was nothingness. There was just himself, and blank nothingness.

No.— he was not moving towards anything: he was moving almost violently away from everything. (p.174)

XVII章では4人の男が集って、女性の支配的本質ということでは意見が一致するが、“And what’s your way out?”という質問に、両性関係が変化しなければならないが、女の意志は変わらないからそれはありえないということになる。Lillyの、人間は本来孤独なものだという主張が鋭く響いてこの章は終わり、それはAaronに伝わってゆく。妻から逃げ出してみたAaronではあったが、一人ぼっちは耐えられないと感じる。次の2章さらにAaronの迷いを経て、最後の2章ではAaron-Lillyによるロレンスのdoppelgängerのやりとり集中してくる。Aaron’s rodはAaronをどこへ導くのであろうか。“The Priest of Love”たるそれまでのロレンスの世界は、これからしばらく消え去ることが、フルート(love-urge)すなわちAaron’s rodが爆弾によってめちゃめちゃになることによって象徴される。そしてLillyの主張power-urgeが大きく浮び上ってくる。それは両性関係においても、男同志の結合においても、対等な人間関係(それまでロレンスが基調としてきた)ではなく、支配と服従の関係である。そして男性優位の主張である。

Now, in the urge of power, it is the reverse. The woman must submit, but deeply, deeply submit. . . . We must reverse the poles. The woman must now submit — but deeply, deeply, and richly! No subservience. None of that. No slavery. A deep, unfathomable free submission. (p.288)

And men must submit to the greater soul in a man, for their guidance: and women must submit to the positive power-soul in man, for their being. (p.289)

だがここでロレンス(Lilly:Aaron)の質疑応答は、Lillyの熱心な説教にもかかわらず、doppelgängerを一つのものにすることができない。

結局、ロレンスの説くpowerとは次のようなものであるが、いまだ明確ではない。

It is a vast dark source of life and strength in us now, waiting either to issue into true action, or to burst into cataclysm. Power — the power-urge. The will-to-power — but not in Nietzsche’s sense. Not intellectual power. Not mental power. Not conscious will-power. Not even wisdom. But dark, living, fructifying power. (p.288)

ロレンス自身にもいまだ確信のないことが、最後のやりとり (“And whom shall I submit to?” he said. “Your soul will tell you,” replied the other.) に表わされている。どこへ向って進めばよいのか、自問自答はまだ続く。

「愛の予言者」は、男性の女性（母性）に奉仕するような両性関係を否定、また「星の均衡」といった両性関係の理想境追求を諦めた、そして男性同志の結合と男性優位の主張への方向は定めた。これからは “only two great dynamic urges in life: love and power” のうち power-urge を優先して考える。その power-urge は “a vast dark source of life and strength in us”, “dark, living, fructifying power”, 従って人間関係は、それまでの対等なものに代って、強者と弱者の支配と服従の関係となってくる。

And men must submit to the greater soul in a man, for their guidance:
and women must submit to the positive power-soul in man, for their
being. (p.289)

しかし power-urge とはいったい何なのか、いかなる実体をとることになるのか、まだ不明のまま *Aaron's Rod* は終わっている。

III

Kangaroo では、この男性同志の結合と男性優位の主張が具体的に政治運動という形をとって、新大陸、最も自由な国であるオーストラリアにおいて展開する。しかし大抵の意見が一致するように、またロレンス自身も手紙に書いているように¹⁸、できのよい作品とはいえない。

Kangaroo is a chaotic book. It has many passages of great descriptive beauty, but internally it is a chaos. . . . The internal chaos of *Kangaroo* is the internal chaos of Richard Lovat Somers, who is Lawrence.¹⁹

すなわち、Sagar,²⁰ Hough,²¹ Moore²² とも指摘しているように、ロレンスとフリーダの結婚生活を非常に自伝的に持ち込んでいるのであるが、小説そのものの主眼は政治活動における男同志の結合に置かれ、その間にロレンスの強いエゴイズム、自我の高孤（暗黒の神との交感）が必要であることが、低流に絶えず流れており混沌としてしまう。またこの “dark gods” ideas が作者自身にもいまだはっきりとしておらず、Aldington や Hough のような主張によく生かされていない。

Lawrence himself was greatly interested in the nature of power, and many pages and scenes of *Kangaroo* will show the strange battle of wills between himself and his wife when, after nearly ten years of marriage, he laboured and battled unavailingly to prove to her that the basis of marriage is not perfect love but perfect submission of the wife to the husband. This Somers-Harriet contest is one of the major themes of the book, and marvellously true to the characters of Lawrence and

his wife.²³

Here Somers shows himself possessed by the idea that perfect equal love is not as enduring condition, that sooner or later the question of dominance comes up. He believes, like many men, that a healthy marital relation depends on the acknowledgement of male dominance.²⁴

またここでは女性人物は *Aaron's Rod* の場合よりもいっそう陰に潜み、Harriet はいっそう "abandoned figure" となっている。

Harriet, whose tragedy the novel nearly seems to be, has to face the exclusiveness of male comradeship and the necessary separation which sexual difference brings about even in the most intimate marriage.²⁵

"Priest of Love" とも評されるロレンスが、両性関係から目をそらして、男性優位の世界を描こうとする時、優れた作品は生れにくい。*Aaron's Rod* や *Kangaroo* を小説批評の流れから除いた批評家もあり、また論じていても簡単にすませている者が大部分である。*The Love Ethic of D. H. Lawrence* の Spilka などほんの一言で通り過ぎて *Lady Chatterley's Lover* への渡りにすぎない扱いをしている。そこには "Priest of Love" が女性を陰に引込めて、本領ではない男性優位の世界構築のために "dark gods" ideas を主張してみるが、男の世界からも孤立したまま、やはりキリスト教的愛、ヨーロッパ文明の影響下の国であったオーストラリアを淋しく離れてゆく Somers の姿となる。そして本当に小説といえるかどうかという酷評まであって、愛を失った "Priest of Love" は "The artistic wholeness and independent reality of the great preceding novels has almost vanished."²⁶ に陥ってしまったのである。

Aaron's Rod の終りをそのまま受け継いだように Lilly に代わって Somers が新しい自由の大陸オーストラリアに、いかにも清々しく登場する。そして、新しい土地に来てすべてが異なるといった深い感慨の後に、何処へいっても変わらない現実、結婚、妻との関係があるという印象を強くする。

Things seemed so different. . . quite different. But it is useless iffing. Sufficient that Somers went indoors into his little bungalow, and found his wife setting the table for supper, with cold meat and salad.²⁷

Aaron's Rod のクリスマスの寒い夜の黒い重苦しい冒頭に較べて、疲れたヨーロッパ文明から脱しての、新しい大陸・文明（後にやはりヨーロッパ文明、キリスト教文明であることを認めることになるのであるが）の中で、暖かい気候と広々とした大自然の中、オーストラリアであるが故に筆致は快活に進む。人間関係にも以前とは異ったものを期待していることがわかる。例えば Victoria Callcott についての印象にもヨーロッパ女性とは違ったものをみている。

And she had none of the European women's desire to make a conquest of him, none of that feminine rapacity which is so hateful in the old

world. (p.39)

しかし反面、ロレンス夫妻のオーストラリア滞在の実際とほとんど同じに、旅行記のように話しが進められ、古いヨーロッパそして英国から離れて、誰れも知人のいない、二人だけの生活を静かに味わおうとする、落ち着いた気分がよく伝わってくる。従来からの男性優位の世界、男同志の結びつきの主張が繰り返えされるのであるが、淡々としていて、オーストラリアという大自然と、それまでの過去とは無関係の生活環境の中で、ロレンスの気持の動きが最も自然に素直に表わされているように思われる。それに共って Somers の心の中では、男の世界に対する女性としてはっきりと、Harriet と母親として要約されてきている。

Two women in his life he had loved down to the quick of life and death:
his mother and Harriet. (p.109)

So he reasoned with himself. For he had an ingrained instinct or habit
of thought which made him feel that he could never take the move into
activity unless Harriet and his dead mother believed in him. (p.110)

ところが第6章“Kangaroo”において、Kangaroo が登場するあたりから、虚構が持ち込まれることから作品全体がわかりにくく、つまらなくなってくる。Aaron's Rod で結論をみなかった、ロレンスの二面の意識のやりとり、相剋が Somers と Kangaroo の間で繰り返えされる。だがここでは“the force of love”は Kangaroo によって語られ、“Love is mutual,” “a perfect equilibrium” が述べられる。これに対して Somers は“dark gods” ideas を持ち出すことになるのであるが、Somers 自身にもはっきりしていない。

I am not very clear myself. . . . Not through the spirit. Enters us from
the lower self, the dark self, the phallic self, if you like. (p.150)

The god you can never see or visualize, who stands dark on the
threshold of the phallic me. (p.151)

第7章“The Battle of Tongues”の Somers と Kangaroo のやりとり、対決は、いかにも象徴的で、またもやロレンスの二面意識を表わしているように思えてくる。そしてここでもまだ、Doppelgänger が一つにならないで分裂症を起したままである。

“. . . Do you know I love you? — that I loved you long before I
met you?” (Kangaroo)(p.153)

“. . . — I know another God.” (Somers)

“But aren't you merely inventing other terms for the same thing that I
mean, and that I call love?” (Kangaroo)

. . . Somers rose, trembling now, and feeling frail. (p.153)

Somers の迷い、"dark gods" の意識は、この後ずっと終りまで流れてゆく。

第11章 "Willie Struthers and Kangaroo" では、恐らくこの小説の主題提起といえるのであろうが、Kangaroo の "the force of love" に加えて、"the bond of real brotherhood" が Struthers によって提唱される。家族（妻、子供、母親）にも勝る男同志の団結も結局は絶対的なものではないと Somers は思う。しかし絶対的なものが必要なのだ。

Human love, human trust, are always perilous, because they break down.
The greater the love, the greater the trust, and the greater the peril,
the greater the disaster. (p.220)

Yet the human heart must have an absolute. (p.220)

Somers は "the great dark God" にそれを求めようとする。大自然 (bush, the sea, kangaroos, ponies, snakes, など) との交感の中に自我の孤高を感じるあたりは分るのであるが、人との交わりとなると、Kangaroo にその可能性 "Our souls are alike somewhere." (p.385) を感じるのであるが、Kangaroo は結局愛による男同志の結合の域を出ない。死に類してもその主張を繰り返す、"I am not wrong. Love is still the greatest." (p.356)。Kangaroo の再三の懇願、"If you had been with me this would never have happened to me." (p.359) "You've killed me. You've killed me, Lovat! Say you love me, Lovat." (p.369) にもかかわらず、Somers は応じることなく、死にかかっている Kangaroo に "I don't understand what you mean," "No," "I can't say it." (p.370) とはねつける。

"No," said Richard to himself, thinking of Kangaroo. "I don't love him — I detest him. He can die. I'm glad he is dying. . . . In fact I like nobody. I love nobody and I like nobody, and there's the end of it, as far as I'm concerned. And if I go round "loving" anybody else, or even "liking" them, I deserve a kick in the guts like Kangaroo. (p.373)

Aaron's Rod ではついに一つになることのなかった Dopellgänger (Lilly と Aaron) は新天地オーストラリアにやって来て、太平洋と大自然の中で、それまでとは全く関わり合いのない社会の中で、新しい人間関係、特に男の世界、男同志の結びつきを求め、その可能性をオーストラリアを代表する Kangaroo に望んでみた。しかし自由でくたくのない無色のように思われたオーストラリアも、やはり白人のヨーロッパ文明(キリスト教的な愛)を基調にした人間社会であった。²⁸ 動物や自然との交感があったが、人間関係では求めていたようなものは結局オーストラリアでも何も見つけることができなかった—— "The call, call! And the answerer. Where was his answerer? There was no living answerer." (p.375)。オーストラリアを代表する Kangaroo もやはり、ヨーロッパ文明、キリスト教的愛による男の団結を求めるものであった。その Kangaroo を見棄てること (Kangaroo is killed.) すなわち、疲れ果てたヨーロッパ文明に別れを告げることだけはできた、"Love? — he was absolved from love, as if by a great pardon." (p.365)。

この作品全体の重要な出来事である革命も最後には問題ではなくなり無に帰する。すなわちヨーロッパ文明への別れがこの作品の集約ということになる。

He felt another heart-string going to break like the streamers, leaving Australia, leaving his own British connection. . . . farewell Britain and the great Empire. (p.393)

しかも、絶対的なものとして執拗に求めている暗黒の神がいっこうにはっきりしない。ロレンスにも分っていない。

Yet he wanted *some* living friendship with other men; as it was he was just isolated. Maybe a living fellowship! — but not affection, not love, not comradeship. No mates and equality and mingling. Not blood — brotherhood. None on that.

What else? He didn't know. . . . (p.120)

こうした、ロレンスの求めようとするものもいっこうにはっきりしてこず、男の世界も男の団結もいっこうに進まない中で、ロレンスとフリーダの自伝に近い部分だけはいっそう生彩を放ってみえる。12章 “The Nightmare” は大戦中のロレンスの生活、苦渋が生き生きと迫ってくる。また第9章の “Harriet and Lovat at Sea in Marriage” と共に、男同志の世界を Harriet から隔離したものにしておこうとする Somers に対する Harriet の抵抗。

“. . . You and revolution! You're not big enough, not grateful enough to do anything real. I give you my energy and my life, and you want to put me aside as if I was a charwoman. Acknowledge *me* first, before you can be any good.” (p.181)

また Harriet は “He'd never be able to get through the world.” “I suppose I shall have to trail my self along, poor woman, till I see the end of him.” (p.317) と考える。このような部分が、その他の退屈な部分に較べてより真実味をもって迫ってくる。

VI

“Ah, my soul,” said Richard to himself, “you have to look more ways than one. First to the unutterable dark of God: first and foremost. Then to the utterable and sometimes very loud dark of that woman Harriet. I must admit that only the dark god in her fighting with my white idealism has got me so clear: and that only the dark god in her answering the dark god in me has got my soul heavy and fecund with a new sort of infant. But even now I can't bring it forth. I can't bring it forth. I need something else. Some other answer.” (p.295)

Birkin 以来のこの叫びは、女性を見捨てあるいは隔離することによって、イギリス、イタリア、オーストラリアへと場所を変えて続けられてきた。しかし “Priest of Love” が女性を

避けることによって、男性優位の主張のために、“dark gods” idea を必死に模索してみても、それは本領逸脱による無理な話であった。

自分の子供を持つことができず、また軍隊に入れず、社会の中で働き続けることもできなかったロレンスが、男性優位、女性の服従を求めて、わけのわからない男性だけの世界、男性同志の結合を構築しようとすることは、ロレンスの男としての強いエゴイズムの現われである。ある意味では、ロレンスは男性とはうまくゆかず、むしろ女性にとりかこまれる傾向にあった人である。それ故に男性世界の創造を夢みたとはいえるであろう。しかし無理なあがき、幻想であったといわざるを得ない。

Notes

- 1 Emile Delavenay, *D.H. Lawrence: The Man and His Work*, trans, Katherine M. Delavenay (London: Heinemann, 1972), p.385.
- 2 *Ibid.*, p.400.
- 3 Harry T. Moore, *The Life and Works of D.H. Lawrence* (London: George Allen & Unwin, 1951), p.170.
- 4 Alastair Niven, *D.H. Lawrence: The Novels* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), p.138.
- 5 Keith Sagar, *The Art of D.H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), p.102.
- 6 *Ibid.*, pp.113-4.
- 7 Graham Hough, *The Dark Sun: A Study of D.H. Lawrence* (London: Duckworth, 1975), p.95.
- 8 Ronald P. Draper, *D.H. Lawrence* (University of Aberdeen, 1976), p.94.
- 9 J. Middleton Murry, *D.H. Lawrence: Son of Woman* (London: Jonathan Cape 1954), p.213.
- 10 Hough, *The Dark Sun*, p.96.
- 11 Richard Aldington, *Portrait of a Genius, But . . .* (London: Heinemann, 1950), p.224.
- 12 Niven, *The Novels*, p.142.
- 13 Murry, *Son of Woman*, p.202.
- 14 Niven, *The Novels*, p.139.
- 15 D.H. Lawrence, *Aaron's Rod* (London Heinemann, 1963), p.18. All subsequent page references to *Aaron's Rod* are to this edition.
- 16 Murry, *Son of Woman*, p.210.
- 17 Hough, *The Dark Sun*, p.102.
- 18 “a queer show” (p.708), “a weird thing of a novel” (p.709), “funny sort of novel where nothing happens and such a lot of things *should* happen” (p.711), “I have nearly finished my novel here — but such a novel! Even the *Ulysses* will spit at it.” (p.711) All page references are to Harry T. Moore, ed., *The Collected Letters of D. H. Lawrence* (London: Heinemann, 1970), II.
- 19 Murry, *Son of Woman*, p.238.
- 20 “The autobiographical material, apart from the “Night Mare” chapter, focuses on the marriage between Richard Lovat Somers and Harriet, here more clearly Lawrence and Frieda than any other couple in his fiction.” (Sagar, *The Art*, p.131.)
- 21 “. . . and there is accordingly a good deal of straight autobiography about himself and Frieda. The marriage question is closely connected, as in *Aaron's Rod*, with the relation between man and man, . . .” (Hough, *The Dark Sun*, p.104.)
- 22 “The picture of the Lawrence's marriage as given in *Kangaroo* is the fullest and truest Lawrence ever painted of it.” (Moore, *The Life and Works*, p.213.)
- 23 D. H. Lawrence, *Kangaroo* (Penguin Books, 1963), p.9. (Introduction by Richard Aldington)
- 24 Hough, *The Dark Sun*, p.108.
- 25 Niven, *The Novels*, p.147.
- 26 Draper, *D. H. Lawrence*, p.88.

- 27 Lawrence, *Kangaroo*, p.20-1. All subsequent page references to *Kangaroo* are to this edition.
- 28 "Somers diffidently proposes his own dark god as the true source of power in the universe; . . . Surely what *Kangaroo* presents is Christianity, but the whole religious outlook that sees love as the motive power of the Universe. He is almost a symbol of the Saviour." (Hough, *The Dark Sun*, pp.11-2.)